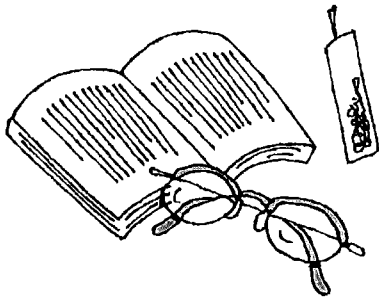


三月のテーマ 謙虚に生きる

自分の善を誇る悪

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二二・一九九九）のこゝとばを掲載します。



え・小島サエキチ

朝 はやく起きた。すがすがしい気持ちだ。外の掃除をす

る。勉強をしに行ってくる。偉くなつたような気分だ。

ところが帰ってくるのと、陽はもう高くなっているのに、家の者はまだ眠りかけている。

「なあーんだ。まだ眠っている。馬鹿な…自分はこんな善いことをしてきたのに…」

こうした気持ちで肚の中に湧く。眠りかけている連中が、いかにも愚劣な者のように思えてくる。自分は善いことをしたのだという快感がひとしきり強くなる。

早く起きて勉強したのは、たしかによいことであつた。断じて悪事ではない。しかし問題はその後

に生じたのである。それは寝ている者と比較して、自分を偉く見た点だ。眠っている者を見下し、軽蔑する気持ちが湧いただけ、それだけ自分が偉くなっている。そこが悪いのである。重いものを持って、困っている老人が目についた。どうしようかとちよつと考えたが、手伝つてや

ることに決め、駅までその荷物をもつてあげた。「ありがとうござい

自体は悪いことではない。しかし誇りは自惚れと紙一重である。自分が善いことをして誇り、正しいといつては他を責め、人の意見を包容できず、受けつけないでいると、それだけでせまい固い殻の中にとじこもってしまう。

「今日はよいことをしたぞ。年寄りを助けてやったんだ。どうだ、どうだ…」

（自分は善いことひとつろくにできない。これではだめだ、なんとかして…）と思っているほうがむしろ尊い。小さな善をコツコツと積み上げていって、天までのぼるようなことを夢みているよりも、何ひとつできないこの自分の額を低く大地にすりつけているほうが輝かしいのだ。

謙虚さの全くない、このような愚劣な振舞など自分ならぜつたいにしないと思つているかもしれない。しかし、助けてやつて善いことをしたと、口には出さなくても心の中で得々としていることがあるのではなからうか。形には表わさなくても心に思つておれば同じことだ。

寄附をしても自分の名前が出ていないと不愉快に思つたりすることがありはしないか。その底に他人に誇る気持ちがあるのではないか。善いことをしても誉められないと、おもしろくないことがありはしないか。その心の奥に自分の善を他人に誇りたい気持ちがあるのではなからうか。

一般に誇りをもつことは、それ

*

（月刊『新世』一九七三年九月号より）